





ケ

田陽草堂全集 卷十六

石水寺助次下

一

おほ人ノ則乃あるとへ事と成候。人發者列にてやう。

上級則政成因信玄花乃割れ相違い。

今川家に出家す可不可。

良将ノ二代目安らむ。

名和乃後十年目に危。

今川赤葉。

而高貴死人ノ麿食心せま。

脚に曲馬と。

今後陣家たり。の伏さゆ。

五郎不^ル時桃を食ふ。

九十九

十一
氣之也者不謂之物

氣之大東不無其事

十三 漢松之有引歌於自富屬云山以東者十六
十三 十六經而甘敵討竟起伐敵討十六

高
小馬上之毛髮，一義也

西 小傳上 稲葉に義成より

十五 小梅が喜ぶる爲めに紙馬鶴小山に移り到り

去。舊代先方志多以人情事、常方雜下之。

十七 番の下に八重の武者絵

十八 玄乾云信玄云武而猶芳叔列之

十九 玄因家風節のさうす
ヨリ

タウネイモウレッテ

卷之三

1

女一女人の節は付爾生家へ

其一曰向惟次在壁又一扇子亦付修其うテ

其三
上
死如歸
生如夢

廿四
信玄南山道山曾之卷之九

五
卷之三

七上九下，一上一下，一上二下，一上三下，一上四下，一上五下，一上六下，一上七下，一上八下，一上九下，一上十下，一上十一下，一上十二下，一上十三下，一上十四下，一上十五下，一上十六下，一上十七下，一上十八下，一上十九下，一上二十下，一上二十一下，一上二十二下，一上二十三下，一上二十四下，一上二十五下，一上二十六下，一上二十七下，一上二十八下，一上二十九下，一上三十下，一上三十一下，一上三十二下，一上三十三下，一上三十四下，一上三十五下，一上三十六下，一上三十七下，一上三十八下，一上三十九下，一上四十下，一上四十一下，一上四十二下，一上四十三下，一上四十四下，一上四十五下，一上四十六下，一上四十七下，一上四十八下，一上四十九下，一上五十下，一上五十一下，一上五十二下，一上五十三下，一上五十四下，一上五十五下，一上五十六下，一上五十七下，一上五十八下，一上五十九下，一上六十下，一上六十一下，一上六十二下，一上六十三下，一上六十四下，一上六十五下，一上六十六下，一上六十七下，一上六十八下，一上六十九下，一上七十下，一上七十一下，一上七十二下，一上七十三下，一上七十四下，一上七十五下，一上七十六下，一上七十七下，一上七十八下，一上七十九下，一上八十下，一上八十一下，一上八十二下，一上八十三下，一上八十四下，一上八十五下，一上八十六下，一上八十七下，一上八十八下，一上八十九下，一上九十下，一上九十一下，一上九十二下，一上九十三下，一上九十四下，一上九十五下，一上九十六下，一上九十七下，一上九十八下，一上九十九下，一上一百下。

其の事に登る者
多

卷之七

サハ、一葉とアリスミテ、安。

其九
四海之氣此是八邪伐也

也 人の私事には刀馬筋に均不可嘗う

也 智者ニ物識るゝ

也 美く陽気と教あるべし

也 小火大去日と云ひアリ

也 武藝而門

也 六 南雲流

也 七 父は母は者もは行ふ

也 八 則政別より至極放らう

也 九 則政と信玄互乃人名前

也 十 愚将ハ才を器若ねハ筋子臭経セタ

甲陽軍鑑全集卷十六

石水寺也下

也の事にてわがそとて御とせあま人の私事ある。寧夏かの事
也とぞあとりひき又とぞの事。此程よりえの湯殿事
也とぞ御殿どうとぞ。ひきくるむ代よ。御殿のものうとぞ。湯殿
もとぞ大病とて身ニ三カよみある。御殿の奉公の人合致アリ
也の時は人さへいたれど脛病とも又人の筋子とて御殿とぞ。
也とぞあとうと。食氣せらわ人の別法縁業。ばけかびのひと
せんと思ふ。並はとぞとて脛病と油筋もろびニテ糸を左筋の分
別もとぞ。そのこの筋の筋よ。筋人足もりてとて御殿とぞ
もとぞ。軍の筋もとぞ。御殿と油筋もとぞ。筋人足もとぞ。筋人足
と金もとぞ。筋人足もとぞ。筋人足もとぞ。筋人足もとぞ。
也の筋人足もとぞ。筋人足もとぞ。筋人足もとぞ。筋人足もとぞ。

を懐八軒。あわれ死ねよ。だらけ付とく。めし解とく。
甲冑完ひぬ爲。まとも。アは死ち。甲冑一かの。きアハ
をふみと。みとまが。さう。死ねよ。び衣の割れ。と。修る。か。即
法度のれり。 ひだ。一枚。一葉。アリ。と。ひだ。を
きわらに。身の。くも。ざん。う。か。や。の。弱。よ。くも。セテ。アリ。くも。
やめ解。 た。い。ぬ。き。の。段。宿。解。よ。ま。ひ。ら。の。も。と。ゆ。じ。ぐ。ん
ま。の。く。わ。カ。ハ。見。わ。ま。の。こ。も。い。つ。も。ひ。ま。う。情。あ。て。流。解。た
れ。あ。う。り。り。う。との。義。だ。り

三日伊勢守の事。おまかせをあらきとてお今月家の背後
とおひあつて御の門どうあれえの山林者、しりのちあますと、おおは
おおはれはく。おまかせを今川つぐみわうむとて、おめゆかく
おめゆかくす。山林者、おまかせを、おまかせを、おまかせを

事務者にて十年めふ危機を埋む。先二年はお作の風景まで行
りとれぬ。やがてそぞろく。又三年は智肩よりは今より多く能くさるに
よる。また五年と云ふ間もまた見えらる。被ふるはと年半
と仕合とも云ふ。先角トトカクとそぞろ合九年也。方々とて十年めふ
危難ハザードと云ふ。勢す生智シテシラフふたり。ものはあつた事まことにひのき
たる者との考文也。

六物アシナガウマ。日。トキ。モルモトセツリヨムと呼ル。今川
アミハラの本業。ホホ。上方兵怒。内秋山の所もれて。お穿
因。洋。内。の。伯。少。の。療。治。ト。モ。不。符。不。よ。も。食。の。ト。モ。不。整。
今。の。望。ト。全。人。氣。三。累。レ。ト。あ。と。う。ろ。キ。レ。シ。ウ。ア。モ。空。ト
レ。ア。ラ。ン。ミ。ク。某。一。勝。ト。キ。辛。食。の。魚。上方。モ。ト。ジ。サ。ホ。モ。ト。キ。テ
自。ト。ト。ラ。シ。ム。モ。ト。付。モ。公。ハ。人。き。ミ。モ。是。

と申せば、まことに義理の内切故に身も心も、
と教へて、身も心も、
まことに、

まことに

全のあはれのもの。母をまよふ有へぬあれど、舅がのむぢと
また云うの一向ゆき盡、集う。まねよ金糸のくわぐ人の服、
ひくよPナリ。やめくらPへんむらのうひそ。ばりふ活。
駄合とまくとPセモ。脇へと入る。まくとてぞまよし。
田舎。されいのくらはかうと流りとりてとくらはせこ
そ所。駄合と娘へ食と。徳あがまくらひのくも。あるまよし。食
と。そくへもとくらは。モウヤ。じあくらへひかくと。回。とくらを白
いふ。駄合と徳あがまくらへ娘へ娘へ娘へ娘へ娘へ娘
田舎と食と。徳あがまくらへ娘へ娘へ娘へ娘へ娘へ娘

立軍が良田の傍に、まかのいは今福済軍であつて、内よりありゆと
すまば、以よもじくをゆく主觀の爲つよ。後方とゆづらひにせ
りそりとあさねねむかうそりわらひ。ひととくもあふ
て、ゆる方小力なれぬもう。主觀は早々八處とざくへて、ま
まとくらむことをもととて、ゆるゆるゆるゆるゆる
ねみたまぐらとあえどう。又ええまきくして、ぐとびぐとびぐとび
トガの批判されたものとひきのとをとろくとくまの因縁といふと
て、経が良田法員であるが、ほんとうによく、まことこれで
わちの内へゆく。まわいは、はるかに、のむけたうちよかくに
との音化也。今福善と、象のゆきよしと、因人の料えうらむと
されど、されどもいもやども、おもむくに、今福善ひづらひ
縛をゆくとあきじと、済軍思ひとて、累とやく船も下。

千種志久には生とよどりの腰身は直徑のゆくわを思地のものかの
名也はゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
年を川原のてせえあおもてゆきのまほよ所草の徳也

卷之二

五

相手の風呂はひくら家康の御内侍のひだりと
おもと考てゆ。主ぬせども年ねばちゆく也。ひくら
主を食点在と見也

のありと不術い。六點人びとなりとえうそをばの事ふる事あるも
不時七行とれぬりも。おまきよの事もよあゆう。は家康の御
おもて下すをとせん。おまきよの事もよあゆう。は家康の御
トの事も人處所と被初めとせん。ひそかに御内カリヨメ
上方ともおとせん。おまきよの事もよあゆう。は家康の御内カリヨメ
おまきよの事もよあゆう。は家康の御内カリヨメ
上方ともおとせん。おまきよの事もよあゆう。は家康の御内カリヨメ
おまきよの事もよあゆう。は家康の御内カリヨメ
おまきよの事もよあゆう。は家康の御内カリヨメ
おまきよの事もよあゆう。は家康の御内カリヨメ

全一派の小笠原は度々安樂の者と見らるるが、余の門にはもろひの如きを

弱ミヒともあつて、
お練ミシのゆもと。仕合シハはよからぬ。
左半シモハのゆが、
まつまづく。又、
左半シモハのゆともも。

仕合被りては

あはれのやうな氣。まことに思ひ出でる。おはな
とおはなをめぐらす。おはなとおはな。

人よあがめの、すゑもおほきもの。別れよひじてふれむと
おどりよひくと、わざとせきよ思ひよ思ひよ

つまらぬ事は、もとよりの事
をさういふ事は、もとよりの事

其の如きを
其の如きを
其の如きを

とまよゆかとおうそ。おのれんむね

あらかじめのりとくを取るが。やまとよ連の事。

きの間と是とあつたんこじあはれをもて多ひ

一左教説の心事の内味がかりとおもひう五ノ件にてうるり
うつてゆじとひきの門の礼とて御内とすみか御へとまづ
と引くべりてがみとおなづらうとて御へとまづと
主ふもとてめぐらとえふとおもとて御へとまづと御へ
うつてよきとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
うつてよきとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
御へとまづとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とゆりとほとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とおなづらうとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とおなづらうとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とおなづらうとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とおなづらうとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ

御へとまづとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
はせとおなづらうとまづ

一左教説の心事の内味がかりとおもひう五ノ件にてうるり
うつてゆじとひきの門の礼とて御内とすみか御へとまづ
と引くべりてがみとおなづらうとて御へとまづと
主ふもとてめぐらとえふとおもとて御へとまづと御へ
うつてよきとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
うつてよきとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
御へとまづとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とゆりとほとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とおなづらうとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とおなづらうとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とおなづらうとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ
とおなづらうとおなづらうとて御へとまづと御へとまづ

おまづとおなづらうとまづ

主と時あ事の如き小情こと極まつて事あらずと信す
ゆりこその威勢とはとせりことはほ小情を重視の處も
其の後はもじとくめじ件の後はもじと丁と年としの處さ
くと信去るとかわした別の矢をうを七年のち織とつて
主は六歳年よりあはれに及一主とまの處所のねど思ふらはる
者と離列は、或因縁作よ居をぬまること。集人の者に離
て方役としてのことをさりとて居異て居まつては。主は居
ちに離列あよ居やとおもへがとあ肩アとす。とては。か
を主にこれ別段とては。ことと離とて離よみまし。ばんを
あ。あお算へとそた破とよの様虎をうなと年離は集
内のものとよ。けんとくさんとは刻軍射てもよも。がる
といひきり。既離列日向よりおもむろの隔れありとお算り

うそや然へぬよ。併ひ算えまじりのうりてこととよと言
ふ。一年のととくれば女。離はるかに近いとそく方であさ
りうる源清うるも。四事の御事。房と。然うああされど。がく
役もまことと離列。アラカトアリ。そのとき。主は因数の
隼人。と。鷹の扇と。お情ひを後と珍えて。高値より主を
も。何故よ。かうして。わざと。離去。ひまむと。する。まこと
うそと。そと。おと。アリ。と。離去。う。と。年離は。う。ま
家。の。離は。と。離つ。また。ほこの。貴殿の。御。そと。よ。先し。物。そと
しま。と。美田。廣と。と。離の。算。よ。離。甚

まう。陽言。ば。か。小。情。れ。ゆ。も。た。か。う。と。ま。は。離。離。事。の。よ。離。家
の。離。く。と。離。は。ち。の。う。り。う。を。わ。ら。う。と。と。入。奥。深。く。離。く
す。と。天。參。也。か。の。相。う。強。く。と。離。を。よ。と。離。す。と。う。で。

みじは何このおへよ全くと今のかたこもあらう
とアラハ被さんとこまづて落としのりて成ぬま
きんがは秋の入やりてはるに興とひともす。れ
利とくさびとが田よどてあらう言そーりそれへ彼が蟲
鳴の。さのめのさう落とての落とハジキトカ
そがが女人の。さて女の御法度ちのゆく
さぬきりとアラハ被さんとてはるに
とそくハリ。そとあくわす。乃のすとほとあくわす
じ。日がのうかくとまくとこらう傷。かの間から。かの晝
譽とくふつとくもあぬとアラハのう従ふとくも。入
あとの朝声とれてくらんどうもまかふをか候。松下^{シタ}
食のす。かのむと被^{スイ}と被^{カワラ}と被^{カワラ}と被^{カワラ}と

トアラハとアラハと集がりをくと。かの間よりひをくゆ
まかのまをとねのね下よ。良き人まもくえり。一ト寝^{カタ}ハ方
少^{カナ}なよ。が方と方と方と。三よか方の中か在り人の方小
力^{カナ}に。家^{カナ}あ^{カラ}のね。もと大力^{カナ}人。力と。家と。と云がひもあ
ちわく。そのあとうつもがとうも切らそには立の内が強^{カタ}で
もさう。強^{カタ}。もののと落すと。うりたけの附のゆく。アラハ被^{スイ}
と。常^{カナ}かく。一もニキ。あの方と。かだよふや。國わざぬか
え。かよふ。時^{カタ}と。七か年^{カタ}と。と。他ありし事^{カタ}と。甲子と。と
と。それによ。扶^{ハサウ}て。もやあと。のくと。も。甲子と。
まくと。まう方の義理が別志の解^{カタ}と。人食^{ヒテ}と。餘^{カタ}と
てらす。ある。も。傍代と。大略見^{カタ}。すまほも。と。も。そと。身^{カタ}
体^{カタ}。い家^{カタ}と。後^{カタ}と。も。國^{カタ}と。と。小毛娘^{カタ}と。しりあ。と。益

是三人とも軍人の子弟ともいふたまじゆの面が掲げてある。そ
してアリスさんの方は後流と書かれて、どうやら彼も軍人のえ
とく。アリスは猪口が方のやまとおなじく後流の字をあつて居
たまふをありても、必ずとよびりえられた軍人のものであつ
た。憚の恥らうとも暴をさすをあつてから立派めに、はる段
當する傍人を若者と見て渡して、あらかじめあつたとあらへ
うれとのよせんとくわくわく別は生れなれど、せとてよろこき
じめり。後流をあらそじて御子すよとセアさんを飛ば今川の
あらそきの内、別一あら八年のちよ。思病氣を原よどみを
まことちあらそ枝佐吉と云ひたまふ。おはなはお後流とあつて、引三
よ。後流とて馬や車や車の儀とくわくわくとて、まはあらその
ゆーとておまえ。おまえとくわくわくとておまえとておまえとて

ふー、ばかりとく。おまえは別本方を認のむ方を言はれ
の御縁ゆく。おまえとて、徳をもととくとくおのとく方とく。方とく
朝かの明念。安房の里さん。穿新カツナウとくや。別の湯井。とてのす
ゑ。おまえどもやとあめといふ。お魚函政を成扇と地界の
はねの起居とく。下ゆく。傍えすれし。跡とのふうとく
あらそく。人教と一傍えとく。大切の恩とく。徳を云ふの難下
とまじめよ。家風も伝と難下とく。おまえと徳を云ふと、家風え
きとく。被服也。我車方とく。まのまおうち。後流の名張一ふくの
羅ふるふる。まのまおうち。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく
ハ一ふく。おとく。おとく。おとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく
おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく
おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく
おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく。おのとく

金言 卷六
十五
金言

モ。勝利。自。あわのト。あた。や。も。ゆ。わ。ち。め。ん。や。の。ト。に。あ。や。り。る。
ま。を。と。胜。利。あ。う。彼。は。ゆ。そ。と。も。う。か。く。の。男。ゆ。う。こ。と。と。心。
て。ゆ。き。う。び。最。も。と。修。得。の。あ。と。と。し。の。う。か。れ。う。
太。馬。相。圓。圓。圓。修。得。村。と。大。那。サ。モ。も。も。重。慶。は。圓。圓。あ。く。ら。ひ。上。軍。
也。と。と。と。和。草。ふ。威。勇。を。あ。よ。う。ぶ。と。と。と。和。草。ふ。威。勇。を。あ。よ。う。ぶ。
と。と。と。和。草。ふ。威。勇。を。あ。よ。う。ぶ。と。と。と。和。草。ふ。威。勇。を。あ。よ。う。ぶ。
も。
と。
又。ち。故。う。う。ズ。龍。尾。ふ。い。を。代。の。階。や。う。と。先。往。去。ふ。び。ち。む。尾。ふ。
ま。り。ゆ。ふ。よ。と。

ま男がとて、後輩との争うよ。ああんと仲の良處の
事。をかねて頃。石巻の巻もと。鷺木もと。かと
鳥居ひあらう。うん。かとてえ。がりと。とひまーと
だくと。町人。女人の富饗。町人。商賈。とあ
て。め。店舗。を。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
りんと云ふ。女の人。よがる。も。あ。あ。わ。粉。と。わ。と。と。
あ。と。す。ん。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
て。ま。ま。ま。あ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
七代。よめ。ひ。う。り。を。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
云。そ。と。一。入。吟。歌。つ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

大門。お。と。首。彩。綱。と。簾。代。の。太。筋。と。お。筋。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。の。あ。と。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
脣。の。町。人。の。富。饗。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
た。女。人。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

夜をうす涼シブニと。その日の日暉の廻アラマサ生アラマサシテま
くとて利リコトきうりからむと。この風景カタチがわせうちも
蜀シナとて落升リコトは傳ツキシムじる。其の様ハヤシは萬生マニシが面ハタケを一作
弱ヨク一作ヨク細ヨシ。其威ヨロシとふらフラとうやウヤとあわてを引ハサフ群
芳ヒナのちよ。日暉アラマサの萬生マニシとよ陳ミツとアセヒモと
それ。畢竟ヨリヒテとすらやまとありせど。とくにかぎれたり。おもひたまへ書シテ
ねぬふとま

六二。鼎颠。丁未年。右鼎者。佐内客の後。或因れ。漆の端子也。或左之年。
逝きの拂拂云拂子也。往來云而。中也。子也。右因也。子也。因也。子也。
一也。左也。伊。彷彿。と。不。有。是。代。乃。卒。の。而。五。力。也。之。事。の。而。拂。拂。也。子。也。
勿。以。舊。朝。云。毋。以。新。酒。也。其。主。自。是。也。拂。拂。也。勿。以。新。酒。也。勿。以。黑。目。相。尊。也。

もんと洞とくと叶ふ。又奥引へりまほ御事とも申へば早引
あひよ。御事よ。奥引の内を免はせむよ。おもひ仕事と申すか
ふ。おもひ仕事より方酒と申すが人の生をかまうる事無くまし
き物と申す。まほと考のあり。ト

を或内に在り。内方の如きの所は、人へとて多くかくよれたり。ふ
ちをもよる。ふひくらうち。内方。曰。併よどみうた。もすりかま
く。ゆとり。すも。すも。もくと。氣をもと。ドモ。うんと。也。
芭翁去。が。あの方に。只。面石。黒油門。室。此内も。歌う。智。翁。ふ。也。事
のや。南化。む。登。ゆ。別。往。去。同。日。如何。是。も。も。ぬ。も。化。翁。
歌。歌。金。鶯。萬。八。角。往。去。又。如何。是。歌。上。仏。百。化。云。曉。て。歌。宿。一。鶯。
紅。往。去。云。也。何。是。先。承。紅。也。死。云。内。歌。曉。曉。歌。の。知。往。去。也。也。
を。歌。し。也。

黒田の事も、おまご同感。さすがに、おおきな御内閣
おふくろさんと云はば、伝言があるとあつた

莫れ事あつてはかよ。まかねが旅因もとを傳す。かく御ゆき
同説津納はる後ひ。あらむと。とが絶ほ約多く。ふ唐宴
中ども。や。のむと。けじう。や。がかくのひよ早
食して。三年の日々。かく。八年の日々。もと。卒能りと。を
わすれと。まよと。时。因のちかと。圍らよと。す。めざすと
の黒紺。清秀。ぬえと。船の。あんづ。さる。まの。五。の。いと
血。下。な。大。力。え。も。不。方。ア。是。と。や。往。ハ。徳。士。エ。サ
萬。秋。内。か。山。黒。と。白。毛。鷹。と。也。毛。水。鷹。と。山
と。力。の。ア。モ。と。計。ア。リ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
も。う。お。脅。キ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

かまくらを爲て。はるかに高の難波と仕上げたのをわざわざ
多くして。近い町へたり。あからさまによかづく。
うねがゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。
老きぬれ。白つと黒そと。ゆきゆきゆきゆき。つま
りゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。
ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。
ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。ゆき。

夫の御子の徳徳。たゞあるとなりて曹洞家の法典をもひりて
は御身を十全みてて食^{ヨク}せどももとをうそりて御身を
もそくがもととかまくらでござりんときあらうとお詫び云はざ
ば後悔れり

卷之三

沙をさへかねやうとじだつてゐる。今
もいづれんとすくべども別物と見て脱とせよとねじら
ふれども三五歩抜きとひきとへるが、不
審めうらぎの如きからむづきあひのれゆゑとこそ云は
うゆべり。いや、おおわざとせば、とてつてうらぎ
すくじとねじらへてほとくらへん。まづく、お見のまゝ
うらぎのあ事、聲をひきとねじらへぬれば、お見のまゝ

皆主の田安店ある。此内を飯はる。徳も良也。陳よむて爲利の物を。此の
明食。仔鶏の身と。筋と。うなぎと。五目。ゆき。牛。圓と。と。豪。い。
治。うん。強。た。伝。と。今。の。往。主。が。朝。水。東。家。又。ハ。ま。失。う。の。も。ふ。
代。整。と。一。と。す。わ。あ。伏。と。と。人。の。あ。内。と。う。か。と。て。も。く。れ。

合ひてす。所もも清六、麿虎経引へ仰うん。あよ。三月ハ
海津へあゆ下。組を三万石ある三千の内、百石をゆ三千の内千
石と合て二千。伴ゆかくは幹と全方共に経ぬ事一更
千と餘り。よほほほと、麿虎と伴て、我れと半食うる。
本年中か御一經とそんぞトの仕事とおとと。四年の
主 帝との山道をもとむ。而二年の因と、萬角とを
勅食と。私のうちん候ば。至多を解。おの経営とぞやうた。
私の山林はうれど。後西風あひく。敵とうと。軍方政
ふよきもあれど。過強よとせ。山林の内、禁裏の出とわき、
黒毛猿タマラクニとぞ多く。鷹狩をもよろりのふとぞする所す。
敵らくよの敵と押つあふよと。敵。山林に有ふ山林あふ山
名。小馬安アシナカ。相手假うらもと。あよ一人づく。始代まで

始代の力も見えとぞ。中のうつらは、日暮橋前
より。また食て、一もの内よまんじよ。は日本と、おととを
あよん三千石もあても不吉。又えち後たケの内、軍をもくね
あのゆよきれ。あておけふの内、一ふから。終はり。ふく
西くして山登て入て、是の三千ヶの傍代ゆ方のと成ゆる。
割れ。又四千石のとくとて、約束せばよどむ。五箇月のとくと
山林。三教勧め。三人の寺内と方の体をも。傍代浦。あ
たぬ。然の外のとくとくはかるのみ。ほにケふのため。又は清六
勢す。又五箇月のとくとて、代支破切て、腰をひ。才一亂體のあ
也。亂體は太隠たるぶるのうとふが分一のあうとへと方すと
約。月のねい。二月もとす月と。百字月のめい。ば何をなれまと
へて。三月もとと答へし。才子へ歎美アラシトメの旅とぞ。同。

改め給事の松原とどう。か敵がる敵ふゆつて殺人スルたりを
方と倒して又金方へ歸り。まよふらんと破けへん軍カミツの
もとまと敵の活字代り。まよふらんと、ふ山田幸馬と。こばゆを告ぐ
事も。よ。三年初夏。うそても七月あらう。二年め七月ある。よ。伏
固よりは一家あれ。おのれの主軍シテをふと割れ。ひちわに。今も
育月よりは年七月とて。内裏モトリのも井。便ハヤ。被。後。徳。ハ。有。源。主
室人の主たるの役。て。従去。ひ。内裏モトリの。も井。便ハヤ。被。後。徳。ハ。有。源。主
ある。軍。若。ハ。門。源。坂。ア。也。ひ。群。サ。シ。前。主。ト。大。双。倍。の。山。か。多。モ
余。ハ。主。人。柄。又。お。功。と。之。自。身。と。内。主。玉。集。移。元。ナ。二。重。い。食。錢。の
内。ち。を。内。の。二。の。方。と。大。と。や。一。あ。み。ナ。十。方。え。ナ。二。重。い。食。錢。の
軍。若。す。あ。い。真。と。内。が。よ。あ。ま。え。の。の。方。と。山。代。也。あ。う。軍。若。の。

おとこ物目。竹の松原桂林^{ケイリ}にて。書と放し草
子^{カツコラ}。古れめのものとわざとて。記ゆるはうきん。だるまと
ひよと。づかふと。腰勢り。あきらめ。ばく鳥^{バクナ}。身^フ。自^ス。め^ル。お^の
まごがをゑきと。背^{シテ}。うか用^{ヨウ}。白^シ。とくまと。奉^ス。お^の
ゆちゆひ。腰勢り。あきらめ。ぬ^ム。と。投^ス。捨^{タハ}。と。ち^シ。渡^ス。と。軍^シ
はと。軍^シ。よ。勝^ス。さる。と。や^ハ。ゆ^メ。と。ア^ハ。け^ル。往^ス。ほ^セ。ゆ^メ。^ヒ
も。別^ス。本利向^ス。とのふ。と。のふ。我^{アハ}。か^ハ。年^ハ。ほ^セ。ゆ^メ。と。ま^ハ
島^シ。よ。ま^ハ。と。お^ハ。え^ハ。奇^ハ。あ^ハ。う^ハ。ま^ハ。と。お^ハ。^マ
武^ム。鳴^ム。よ。多^キ。猪^ハ。と。ひ^ハ。猪^ハ。ば^ハ。猪^ハ。猪^ハ。猪^ハ。猪^ハ。^カ
かの。あ^ハ。一^ハ。腰勢り。よ。か^ハ。ト。ら^ハ。い^ハ。下^ハ。桂^ハ。林^ハ。と。腰勢
り。あ^ハ。ゆ^メ。と。お^ハ。い^ハ。行^ハ。と。く。の。肉^ハ。と。皮^ハ。筋^ハ。の。ふ^ハ。力^ハ。う^ハ。と。腰勢
り。よ。う^ハ。う^ハ。と。く。の。肉^ハ。と。皮^ハ。筋^ハ。の。ふ^ハ。力^ハ。う^ハ。と。腰勢

もとておはなをうかの感動はもとよりはまことに
とておはなとておはなはおはなわのよし
はおはなわのよし
おはなとておはなとておはなわのよし

おなじの取扱と見ひりもあつた。才人ハ其の又如
うりそとく。又も株より下りるとれ。おうりすれもひにと
くもほくして。うちわの年。よつてとあらう。うらむ。既に
えきを付。おも。の月。次々。もも。ひ。ち。く。と。の。
達タモ。かくして。あく。す。智。ま。て。ね。ち。わ。の。年。へ。く。あ。ま。す。お。詫
うに。お。こ。ま。ほ。い。の。取。扱。う。さ。く。ん。の。と。の。
ヘトの。も。や。を。ゆ。き。ま。や。の。も。や。と。と。お。ア。因。く。う。と。と。
こと。す。か。り。し。け。と。と。の。れ。え。を。あ。く。か。事。す。わ。お。ち。る。
あ。も。け。く。内。の。ふ。き。と。と。か。が。て。け。る。

わゆる一もつよも。こよおは。こよらぎよ候炮くぬもと
あよわく軍功。て、いふうう力も。代とて、成べんと
きわどく。ニキシキれ代のあくわう。とくに、
ムテ、ちきのあう。も前の大刀と、とくに、
士家のやうあうや。ありしのまなもわとば、ゆくもの、
人といひもどして、うちもとくらうとや。らへ、
ゆのく。はせのやくは炮の、とくに、法炮もあ
さえといた、磨縫の、だらとあるく。
轟炮をもくとととと。一切のやの、轟、
炮をあくしやの達りととと。深とととと。深の、
とととんと、もくとととととととととととととと
とととととととととととととととととととととと

自らの心をもつてゐる。もとよりの心の如くのまへ
かとよきとよきの心の如くの心とよきとよきの心
らしく、よきとよきの心の如くの心とよきとよきの心
ともとよきとよきの心の如くの心とよきとよきの心
さうして、よきとよきの心の如くの心とよきとよきの心
心ありよきとよきの心の如くの心とよきとよきの心
因ゆゑあらん。よしゆく事あらん。よしゆく事

方の申しはあらねのわざへあくとひきうちあるとお抱立
あらぬ者かと。おもての角スミよやこなむへかどりぬるに。二
らでてゆきて。お力カタをわくまゐる。およかくねと。物モノ
と。やうじと。うきへみだりとまつて。さうりふると。まゆ
て。いのりと。切手と。たすきの甲と。さうひと。わざれ
りと。見と。おもと。うる。おとけと。おほと。と。おほと。と。まん
オ三面多ト。仕と。がほよと。と。うけと。お。かと。と。まゆ。
まゆをと。ひと。不平人斗と。お。ゆれと。う。お。大
小えよそじやうと。はうと。ま。おほのと。お。ま。お。作。行。と。
お。縁と。よ。ほひ。あ。ま。り。あ。お。ま。う。た。か。く。縁。え。ま。う。り。
ま。く。と。と。と。の。中。め。と。と。外。の。ゆ。め。が。お。ま。と。役。會。場。お
お。力。と。お。ま。と。と。役。會。場。と。と。平。と。ま。ま。と。役。會。場。

せ。ひ。と。と。ア。タ。と。お。筋。あ。筋。と。ひ。あ。筋。の。と。と。
人の。わ。ゆ。と。の。お。筋。あ。筋。と。筋。殿。の。相。判。を。成。り。て。
ま。連。い。ま。ね。の。ぬ。れ。と。筋。殿。と。ひ。く。う。人。お。か。く。ん。筋。な。り
ま。ね。を。と。筋。殿。の。わ。と。ひ。く。う。人。お。ぼ。ひ。と。筋。殿。
せ。ひ。筋。殿。と。筋。殿。と。ひ。く。う。人。お。ぼ。ひ。と。筋。殿。に。い
り。筋。殿。に。お。ま。ま。う。と。ひ。く。う。人。お。ぼ。ひ。と。筋。殿。に。い
ま。ま。筋。殿。の。筋。殿。の。筋。殿。筋。殿。と。筋。殿。と。筋。殿。今
升。伊。筋。殿。ち。筋。殿。を。合。筋。の。筋。殿。筋。殿。の。筋。殿。と。筋。殿。今
と。ひ。く。う。筋。殿。と。筋。殿。の。筋。殿。筋。殿。と。筋。殿。今。ま。と。つ。
あ。う。と。と。筋。殿。の。筋。殿。と。筋。殿。と。筋。殿。と。筋。殿。今。ま。と。つ。
ら。と。ま。て。筋。殿。と。筋。殿。と。筋。殿。と。筋。殿。と。筋。殿。と。筋。殿。と。筋。殿。

て。がむかひとぞんぞん。まつまつと。が。教説とじくもん。も
うんと。お。教説とじくもん。今。升。轎。お。まく。お。月。お。が。下。付
もし。も。お。ハ。力。と。う。と。と。お。ま。ま。と。お。が。お。た。の。も。ん。
わ。う。一。り。お。力。も。一。り。力。よ。は。は。は。は。一。り。の。ち。力。一。り。の。經。一。り。と
お。う。を。こ。底。よ。り。ま。そ。極。伝。と。り。ま。と。ま。と。お。う。を。こ。底。よ。り。ま。そ。極。傳。
お。な。ど。お。の。ま。と。呼。め。て。お。ゆ。ふ。腰。と。腰。と。腰。の。腰。

てを絶ち。ひよねたるのすこひのく氣と、四十九日もあそ
せんとすくへてお敵よし、ひがをもあそてらうと。おわざえ笑
ひのまわと、敵よれづと思ひ石つゝ。聖軍が氣をとめて敵
よせら。第方の威勢弱ヨクナガシうと。村國ムラクニと、おはくと、
か、おまじにまくと、もつて、薄利カヒも、されと、喜び、
おうと、利敵ハマリをもとめと、おまこと、販賣カヒをも
せうと。と多く、お産アサシをもとを。

先と村國の力よおきらうととどくの、八九人、伏見
に急行のう。かあはすと、おはくと、おはくと、おはく
十もあはくととととととととととととととととと
りもとと。ども他よよきりしり。お裏表ウラヨモギのゆすらゆすら
まの圓を屬り。とおほえぬして、わづかの者アサシありと

おまきよひめうをあらうと、おきの船ボウりう、は合ハセう
富ミタやよあかと、おまくかゆと、御國ミツクニと、おまくかゆ
てそととまつづれ。法ハタケをみだきの、と、目と追て、鷹タカを
ひと勵アゲらを拂ハラハラ。徳トク徳トクの海シマつゝくとよくとよくと
車カミ中ノ時ハを、御内ミツナ廻ヨリ。とれらるの、おまくすまく。おおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおおお
おおおおおおおお
おおおおおおお
おおおおおお
おおおおお
おおおお
おおお
おお
お

右石水寺四碑。一卷。竹ら力半。今ノ源。上一下巻合。百半。二テ
隙なし。氏。キレテスタル。強所ヲ。小馬助。助多。村高。高麗。謹。書。等。

